

年号が平成から令和に変わり、はや一か月が経とうとしている。

新年号が発表になるまで、いろいろと予想を立てた人も少なくないだろう。私もその一人で「M」「T」「S」「H」この4つのアルファベットで始まる年号は可能性が低いだろうなあと考えていたりした。「R」は予想外であった。

新元号「令和」には、次の時代を担う若者たちが明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができ、希望に満ち溢れた日本をつくりあげてほしいという願いが込められていると思う。

令和に変わった月に私の誕生日もあった。息子たちや友達から「おめでとう」のメッセージがスマホに届き、うれしかった。私には誕生日がくるたびに、いつも思い出すことがある。それは、自分の名前の由来についてである。私は結婚するまで、毎年の誕生日を両親と姉妹が祝ってくれた。母が作るちよつと豪華な夕食と誕生日ケーキを囲み、家族みんなに成長を祝ってもらう。私にとつての誕生日は、そういう特別な日であった。そして、誕生日の食卓では、親が私の誕生エピソードと名前の由来を語ってくれるのがお決まりだった。初めて

名前の由来

会った方には、「いい名前ですね」「きつと大切にされてきたのでしょう」と言われることが多い。誰からも愛され、宝物のように大事にされるようにという思いを込めて付けられた。普段はすっかり忘れているけれど、誕生日になると思い出す、自分の名前の由来。親がどれほど私を愛おしく思ってくれていたのか、どれほど私の幸せを願ってくれていたのか。名前に込められた親の愛の深さが、しみじみと伝わってくる。

最近、虐待や交通事故など、幼い子どもたちが犠牲になる残念なニュースが後を絶たない。この子どもたちが生まれてきたとき、子どもたちの親は幸せを願って名前をつけたことだろう。

親からの最初のプレゼント。親の思いや願いがいつばい詰まった名前。この名前に誇りを持ってこれからも生きていこうと思う。

*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かなつながりが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

問い合わせ

人権啓発広報委員会
☎ 880・6569